

大 澤 主 水

數杯を傾けましたので、さしもの主水もモ一腰が立たない、海鼠の火事見舞のやうに、ヌラリ、ヨタ、主水「アッ、モ一不可ぬ、く、ユ、勇士の酒をア、煽る、カ、必ずしも斯くあるべしじや、ヤイ、く、天神輩、コ、この主水正之を見習へッ」斯んなことを見習つちやア大變でござります、主水は好きなことを喋りながら、他愛く、とコロリと横になつたかと思ふと、早やグウ、く、と雷のやうな聲を掻き、前後不覺、白河夜舟と寝込で了りました、そこに主人もなければ家来もない、山が崩れたつてピクともせない、大膽不敵な主水の舉動、尋常一様、平凡な武士にはなかく、出来る藝當ではございませぬ、あまりの不作法に重臣はじめ家中一統、呆れ返つて寝姿を見入り、ぼんやりいたして居ります、太守もともく、見入つて居られました、が、やがて「ウーン」と合點かれたかと思ふと、日根野備中守

大 澤 主 水

を小招きされる日根「ハ、ッ、鶴籠シッ、静かにく」と手を制しやがて耳に口寄せ何事か囁かれます、備中守はニッコリ笑つて、以前の座席に戻り、次席の長井隼人に耳打さる、長井もニッコリ、次の飛騨守に耳打、すると飛騨もニッコリ、枚野に告げる、夫れから夫れへと耳打すると、みなく、ニコリく、と笑ひます、人数が重立つたものばかりで五十人、ニコリが五十人分、で百ッコロとなる、そこでみなく、ヒョッコリと起き上つたまるで落語でございます、されば日根野、長井、稻葉をはじめ五十人の猛者は、ソツと座を立つて次席へ下がります、するど太守も奥へ道入りになります、目見得以上の武士もやがて次席へ下退つて了りました、跡には廣き近接室に只だ一人の主水が、グウ、く、寝込んで居るのみでございませぬ、四邊はシーンと静まり返つて居ります、ところへ再び立ち出でましたのは先

の五十人の猛者ども、各自に後顧を、玉だすき、袴の股立高く取り、九尺柄の手槍を持つて居ります。上段のところへお出ましになつたのは同じ扮装の義龍公、ツカ〜と夫れへお進みになり、義龍「いしッ」と指揮をいたされますると、「ハ、ッ」と云ふなり五十の猛者、バラ〜と主水の周囲を追ッ取り巻きヒッリと槍を中段に構へ、一令の御指揮の下に、突き伏せんとぞい

主水がさほまでに恐ろしいかッ、稻葉山には齒に立つ、話せる武士は一人も居ないなッ、そんなことぐらゐにヒッつくやうな、大澤主水正之じやないわッ、出直せ〜、ハ、馬鹿らしいッ、このまゝ起きやうともいたしません、吃驚するかと思つたら、案外平氣なもの、却つて冷笑せられて此方は口あんぐり、けれども義龍公は武張つた太守でございますから、槍取り直してクワッとお睨め付け、義龍「コリヤ主水、汝等兄弟は表面に忠を装ひ、内心この義龍に敵討いたすに相違あるまい、余は斯くど知りたるゆゑ、故に汝を此處に誘き寄せ、誅戮いたし呉れるのである、また兄治郎左衛門は追ッ付け征伐の上首を刎ね遣はすから、三途の川で相待ち居れッ、アノこゝな不忠者奴ッ、ソレ皆の者、突き伏せて誅戮いたせッ」と下知を下され、ハッ、と背後へお引きになりませす、それと共に五十人の猛者が「エイヤ―

大澤主水

ッ〜とグル〜ッ〜と主水を取り巻き、槍襖と云ふのを形作たの
でございませ、エー、この槍襖と申しませぬのは、御承知の通り
敵を取り巻いてございませ、この槍襖の中段に構へて、襖のやうに立て
並べらねばございませ、これは非常なる場合、よほどの大敵
であらねばございませ、大御なことはいたしませぬ、マ々この槍襖を
立てられませ、モ一如何なる勇士でも容易に破ることは出
来ないので、十中八九は閉口れて了ふのでございませ、こゝに
太守が計りませしたる槍襖は、何とて齋藤家の名ある猛者のみ
ならず、近國にひびきたつた戦場の古武士なるが上に、青年氣
鋭の近習の鋒々たる若者輩のみでございませ、これを打破
ると云ふのは、實に容易ならぬことなのでございませ、この時
主水はノッリと起き出で、八方に眼を配りながら主水何だと
今聞いて居れば我等兄弟を不忠者だと加之に此城へ誘き寄せ

大澤主水

て誅戮する……ウム、面白い、如何にも誅戮されやう、がしか
しこの主水には骨があるぞ、多藝山で鍛へた鐵腕があるぞ、何
の此奴等の自儘になつて堪るか、また見りやア槍ぶすまを立
てやアがつて、そんなふすまを忍れて居つて、この戦國が渡つて
行けるか、ウー、面白い、サッ大澤主水正之は天下の豪傑だ
ならば、見事に突いて見ろッ、胸わ、足か、頭か、手か、夫れ
とも背かッ、サッ、ズッ、ズッ、ンと突いて見ろッ〜と飽
まで大言吐きながら、ヤッとばかり突ッ立ち上り、夫れでも主
水は一生懸命、八方へ眼を配りながら、キツと身構に及びまし
た、この時背後の方から義龍公義龍備中、ソレ突き伏せッ〜と
激しき御下知、ハッと云ふなり五十人、エイヤ〜ッ〜と一齊に
操り出してまゐりました槍先は、さながら秋の芒の動ぐがごと
く、物凄きこと譬ふるに物なきくらゐでございませ、モ一と

大澤主水

ても主水は叶はぬ、哀れ稲葉山の露と消ぬべき運命に立ち至つたのでございませぬ、然るに主水は決して驚かない主水「シャア、猪牙才なッ」と云ふより飛び切りの術、今隙間もななく操り出した鋭先を、スツと躡すと見れば、二間あまりも飛びあがり、はすみを起してヤツと遙かふすまの外へ飛び降りましたるその早業、實に眼にも止まらんばかりでございませぬ、五十の猛者はアツと驚に油揚を攫はれた白痴のやうに、ぼんやりいたして居る奴を、主水近寄るなり一人の、手槍持つ手を引ッ叩きアツと取り落す奴を拾ひ取り、リュウと引き抜き主水「サツ、主水正之の腕前を知れッ」とキツと身構へに及びました、主水は槍を持たずのは、鬼に金棒のやうなもので、實は主水は槍を取つて、美濃國に立て付くものはないのでございませぬ、そいつがリュウツと振いて構へ付けたのでございませぬから、モ一虎を野

大澤主水

に放つたやうなものでございませぬ、驚いたのは日根野備中備中「ッレ方々、心を合して及向ひ召され皆々「心得たりッ」と五十の猛士、ヤツと此方に向き直り、のがさじものと操り出してまるりました、主水「シャア、猪牙才な木偶の坊奴、サア来いッ」と手槍を風車のごとく振り廻し、近寄る奴をエイ、ヤツと刎ね返し、刎ね上げます、そして身体飛鳥のごとく、彼方此方に飛び交し、人なき境を行くごとく、當るを幸ひ薙ぎ立て蹴立て、かねてより、多藝山において習ひ覺けた鎗術の奥義、顯はす時機は今なりと、秘術を盡して駆け惱す、その堂々たる風姿は、さながら摩利支天の荒れたるごとく、當るべからざる威勢でございませぬ、主水は何でも日根野と鎗を合して遣らんものど、ウサツと突いて来る鎗を刎ね退け、蹴退け、と進んで日根野に槍を附着ました主水「サア當家の重臣日根野備中守、イデヤ

大澤主水

大澤主水正之の鎗先を受けて見よやッ」と鋭先するどく操り出
してまゐりました備中「ヒヤッ」豪いことになつて来たぞ
ア来いッ」と鎗を合しましたが、血氣に逸り、凜々たる勇氣に
満つる主水の刃先何條受けることが出来ませうや、備中守は
見るく鎗を刎ね上げられて了いました備中「ヒヤッ、こいつア
堪らぬ、三十六計……」とドッど逃げ出し、お襖を突き破つて
ズーッと向ふへ逃げ出してしました主水「己れ、卑怯者、返せ
く、逃ぐるど云ふ事やある、返せッ」と呼はりながら、
ドッどばかりに追ッかけました、すると背後から「エイ、ヤッ
ッ」と操り出してまゐりますので、己むなく此方へ向き直り主
水「サア来いッ」と構を附けつ、ッリ、と進む主水「この上は稲
葉伊豫守出る、田樂刺にいたして呉れるッ」こいつを聞いた稻
葉良通「良通「己れ小僧奴ッ、何を申すッ」とヒョリと夫れへ鎗を

大澤主水

附けたが、これまた二合ほどで刎ね上げられて了いました良通
ヒヤッ、こいつア堪らぬ」とドッど逃げ出す、斯う云ふ工合
に重臣方が順々に主水のために槍を投げられ、這々の体で逃げ
出して下さいます、さればなみくの家臣輩は、一堪りもなく槍
を中空へ刎ね飛ばされ、ドッどばかりに逃げ出す奴を主水「ヤッ
この期に及んで卑怯な奴ッ」と追い掛けました、逃足の早い
奴ど見えて、みな甘く逃げ了せて了ひました、主水は無念
の切齒、この上は大守義龍公が相手だどばかり、あまりの奇腕
にぼんやり倚立んで居ります大守の傍へ、韋駄天のそとく飛び
込んでまゐつた主水正之「正之、主君君たらすんば臣くたらす、罪
なき拙者を能くも誅戮なさんといたされたな、この上は正之決
して用敷いたしません、九尺柄穂永の槍をリウーリ扱き、唯一突
と云はせも果てず、九尺柄穂永の槍をリウーリ扱き、唯一突と

大 澤 主 水

操り出してまゐりました、この体に義龍公アルくと顔へ上り
義龍アツ、こりやア何とせん、主水許せ、アリヤみな嘘じ
や、主水「ヤアこの期に及んで言を左右に托するとは御卑怯でござらう、イア尋常に刃を合されいッ」とヤツと一槍突いて出た
ヒヤリッとして飛び退つた義龍「ヒヤリッ、こりやア堪らぬ、モ
主水、許して呉れッ、嘘じや、主水「ナニ、嘘も實もない、
この上は主水の槍玉にこの世の暇、覺悟せられいッ、義龍アツ、
誰か来て呉れッ、亂心者ぞ、誰か来い、」義龍公は更に生き
たる心地いたしません、唇を紫色にいたし、槍を擔いでドツと
ばかりに逃げ出されす、主水「ヤア亂心者とは怪しからぬ、いよ
敵に逐はれて北ぐるると云ふ法やある、たとひ何處に逃げやうと
も、やはかこのまゝ逃さうや、返せ、」と叫はりながら、

大 澤 主 水

ドツと背後から追い掛けます、義龍「ア、ア、豪いことになつて了
つた、誰か来て呉れ、」大音に呼はりまするが、誰一人として出會
者、出會へ、と、大音に呼はりまするが、誰一人として出會
ふもの、右に左に、北に、南に、足許怪しく逃げ出します、そいつ
を背後から主水「返せ、」と矢聲を掛ける、こ
の度に大守は、ハツと首を縮める、モ、息も絶々に、義龍公は
ドツと逃げたが、逐うて来る方が早いので、早や御殿の隅の
方まで追ッ詰めたが、その間隔二間あまりになつて了りました
モ、こゝに至つては絶命、義龍公は義龍アツ、主水、許し
て呉れ、余が悪かつた、許せ、主水は槍を斯らヒッリ中段に構
へながら、主水「何でござる、御前、この一槍で御身の生命が、

大 澤 主 水

……義龍「ブル、ッ、モ、モウ好い、許して呉れッ」とベ
カリと夫れへ下座つて了いました、主水はモ、好からうと思
ましたから、手槍投げ捨て一段退り、ハッど平伏いたしまして
主水「御前、如何でござりまする、義龍「フ、ッ、ア、苦しい、
ト、飛んでもない目に逢され、余はモ、ハヤ生命は無きものと認
めて居つた、ア、苦しい主水「凡そ御前、勇士豪傑の腕を試すに
は、それ、法則のあるものでござりまする、再び斯やうなこ
とを遊ばしまするな、義龍「ウ、モ、頼まれてもこんな苦しきこ
とはいたさぬ、ト、飛んだ目に逢はれた、ア、」云つてる
ところへ五十の猛士、ア、出でまゐりまして、皆々「御前、目
出度うぞんじます、義龍「何が目出度い、ア、」こゝな不忠者奴、
余が斯くのごとく苦しむ居るを、一人として出會ふものなく
今のこゝと、お目出度いとは何事である、皆々「イヤ主水どの、

大 澤 主 水

滅多に主君を害するやうなことは決してございませぬ、また偶
然には斯やうな目にお逢ひあそばすのは、お身のために宜しか
らうと思ひまして……義龍「ハ、馬鹿なことを申せッ、不都合な
奴じや、」それからまた改めて御酒宴と云ふことに相成りました
が、深く主水正之の腕を信頼され、何事にも主水々々と御寵愛
になりませす、然るにこゝに尾州清洲の織田信長はその武威四隣
にひびき、當美濃を攻畧らんと、風聞頻りに立ちましたので、
國境を嚴重に警戒いたすと云ふことに相成りましたが、さても
これから主水正之、主家を安きに置くには、まづ信長を亡きも
のにするのが捷徑であると思ひ、主君ならびに兄治郎左衛門に
水盃を取つて別れを告げ、單身尾州へ乗り込んで織田家へ入り
込む、その間丹羽は犬山に近きところにおいて、野上三平の娘
さんとは知らず、これを助け、さんの養い父が彼の香井新介の

大 澤 主 水

用心棒早瀬逸郎の父であらうとは……ここにいて逸郎さん
 を誘拐さんと圖る、そこへもつて来て敵松永軍太が點綴いたし
 これまた十蔵へ對する義理合から、廻り合ひは逢ひながら、討
 つことならぬ因果が傳はりまして、清洲熱田の宮の歸途、信
 長を刺さんとせし女丈夫の現はれ、それから布いて秀吉を除か
 んため、御前においで、槍問答、ついで御前仕合になり、見願は
 されてさん主水の身が、錯綜いたし、佳境に入り、眞のこ
 んぐら返つていよ、錯綜いたし、佳境に入り、眞のこ
 主水の腹はこれから現はし、奴がまるりまして、遺骸紙
 数の制限、高座のお時と云ふ引きつゞき「烈婦女馬士」と標
 がらこの邊でお預りといふことにございますから出版の上
 を下しました、御機嫌を伺ふことにございますから出版の上
 は相變らず御愛讀のほどを、豫じめお願ひ申し上げ置きます……。

明治四十二年十一月十日印刷
 明治四十二年十一月十三日發行

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 大澤主水奥附
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

發行者 博多久吉

大阪市南區大寶寺町西之丁廿二番地

印刷者 南谷新七

大阪市西區北堀江下通登丁目六番地



發賣所

博多成象堂

大阪市南區大寶寺町佐野屋橋筋西へ入南側

電話南壹壹七七番
 振替口座大阪七三三三番

260
513

Vertical text columns on the right page, including a boxed section and faint bleed-through from the reverse side.

博
文
成
家
書
行

終